

## 困りを抱える児童生徒への効果的な SST（2 年次） —学級での集団 SST を中心としたソーシャルスキルの育成と支援のあり方— 馬場 啓輔（京都市総合教育センター研究課 研究員）

平成 19 年、文部科学省による特別支援教育に関する通知により各校で校内委員会が設置され、それ以来、困りを抱える児童生徒に対する指導や支援の充実が図られてきた。本市においても総合育成支援教育に関わる専門性の高い人材の育成や LD 等通級指導教室、SSW、SC 等の加配が行われている。

この時節に今一度、児童生徒が学校生活の中で最も長い時間を過ごす学級に焦点を当てることで、学級担任が中心となって総合育成支援教育を実践することができるようになることを考え、学級での SST の必要性やあり方、LD 等通級指導教室を含めた校内資源の活用法などについて小学校での取組をもとに検証した。

### 第 1 章 児童生徒のソーシャルスキルを高めるために

#### 第 1 節 困りを抱える児童生徒

平成 29 年、全国の公立小中学校で通級による指導を受けている児童生徒数が 10 万人を超えた。そのうち LD、ADHD、自閉症、情緒障害の児童生徒数は総数の約 63% を占めている。

1 年次の研究において、これらの児童に対する効果的な SST のあり方について検証する中で、通級指導教室だけでソーシャルスキルの育成を図るのではなく、在籍学級の環境を整えて、双方で SST を行いながら内容につながりを持たせるような連続性のある指導を行う必要があると感じられた。

#### 第 2 節 学級での SST

児童生徒が学校生活の中で最も長い時間を過ごすのは学級であり、そこで SST を実施することは、困りを抱える児童生徒だけでなく、その他の児童生徒の力も伸ばさせることにつながると考えた。児童生徒全員のソーシャルスキルの力が向上することで、学級の良い雰囲気を作り出すことができるようになり、教科等の学習に必要な自主的に学ぶ姿勢、学級で協力しながら学びを高める態度などの基盤も作り出すことができる。

学級SSTは、児童生徒が実際にソーシャルスキルを使用する教室が指導の場面である。そのため SST と日常場面の間に環境的な差異が生まれることなく、児童生徒が安心してスキルを使用することができる。小学校においては、担任が SST を行った場合、授業場面や生活場面の中で児童のスキル使用状況や児童相互の関わりを観察できるので、継続してフィードバックを行うことも容易であり、高い効果が期待できる。学んだスキルを日常

場面で活用できること、それを維持することが SST で最も重要であるとすれば、学級SSTは学校の中で最も条件の良い指導形態であると考えられることができる。

### 第 2 章 効果的な学級 SST を目指して

#### 第 1 節 学級 SST の設計

学級 SST の計画時にターゲットスキルからスモールステップを抽出し、それを組み合わせて指導することとした。多様に存在しているスモールステップを指導することで、スキルを獲得していない児童のスキル獲得につながり、既にスモールステップのいくつかを身に付けている児童もターゲットスキルの質を向上させることができると考えた。また、これにより児童だけでなく指導者もターゲットスキルに含まれる技能的な要素を俯瞰することができ、計画的な指導や指導後のスキル般化場面での効果的なフィードバックが可能となると考えた。

SST の指導技法に関してはこれまでに多くの研究が行われてきており、大別するとそこで用いられる技法はモデリング、教示、リハーサル、フィードバック、般化の 5 つに分類される。一見すると複雑そうに思えるこれらの用語を図 1 のように平易な言葉に置き換えることで、学級担任の SST に取り組む際の抵抗感を緩和することを意図した。

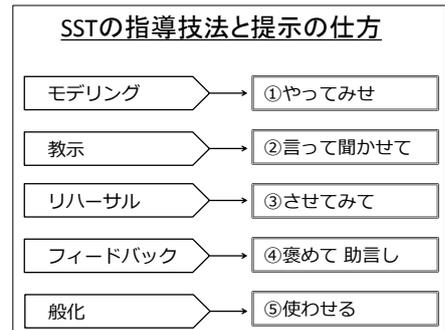


図 1 SST の指導技法と提示の仕方

## 第2節 学級 SST の実践

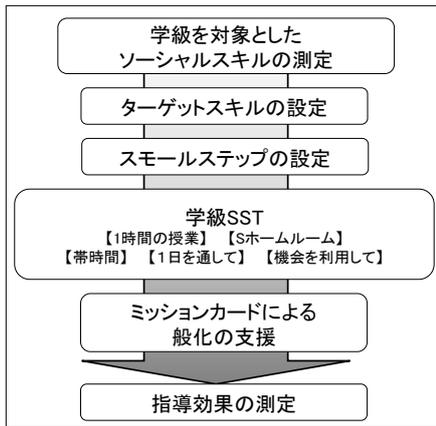


図2 実践の流れ

図2は実践の流れを示したものである。SSTを効果的なものにするために、児童への指導や支援の方法のみに注力するのではなく、児童の実態

を正確に把握し、指導後にその指導効果を明らかにすることができるシステムを開発した。

このシステムには学級に在籍するすべての児童の指導前後のソーシャルスキルの力を測定する機能だけでなく、学級SSTを計画するためのシートや、指導したソーシャルスキルを一般化するための手立てとなるミッションカード等の教材も含まれている。これにより、児童の実態把握から指導後の児童の変容の見取りまでの一連の流れを学校現場でスムーズに行うことができると考えた。

## 第3章 指導の実践

### 第1節 指導まで

児童のソーシャルスキルに関わる力を多角的にとらえるため、担任による他者評価と児童自身による自己評価を行った。これらを前述のシステムの中で分析し、得られた結果を比較・統合したうえでターゲットスキルを設定した。その後、できる限り具体的な行動目標をスモールステップとして児童に提示し、学級SSTを実施した。

### 第2節 指導

実際の指導にはSSTシートを用いた。このシートは各教科等で作成されるような詳細な指導案ではなく、指導の骨子になる部分を構成するためのシートである。ターゲットスキルを選択した状態からの作成ではおよそ5～10分で記入が完了した。

詳細な指導案を作成するには、多くの時間を必要とするが、そういった時間を掛けることが難しい指導者にも作成しやすく、指導の際に手掛かりとなるものがあることで、心理的な余裕にもつながり、獲得させたいスキルの指導に集中できた点で、このシートは大いに成果を示した。

また、困りを抱える児童に対してはLD等通級

指導教室と連携して行う学級SSTでの不足を補う指導や、次回以降の指導に向けた事前指導を行うことにより指導の効果の向上を目指した。

### 第3節 指導後

児童が、学級SSTで学んだソーシャルスキルを主体的に日常生活で使用することを旨として補助教材を作成し、これを活用した。児童一人一人が非常に意欲的にこれを使用し、児童のスキルを使用しようという意欲を喚起する上で非常に効果的であった。

また、指導前後の変容を児童自身に確認させることで、現在の自分の状態を客観的に見とり、今後どのようなことを学びたいかを考えられるようにすることで、主体的にSSTに取り組む姿勢を引き出すことにつながった。

## 第4章 研究の成果と課題

### 第1節 効果測定

研究実践終了後、ソーシャルスキルチェックシステムを用いて指導効果の検証を行った。そこでは児童のソーシャルスキルに関わる力が向上する様子のほかに、児童の変容の標準的なパターンやスキルに対する認知が変化した可能性などの興味深い結果が得られた。それらを、児童の自己評価・担任によるチェック・困りを抱える児童の変容という3つの視点から考察した。

### 第2節 より良い指導を目指して

指導前後の評価の比較を行った際、その変化の仕方に極めて興味深い特徴が見られた。指導したソーシャルスキルだけでなく、指導していないソーシャルスキルについても児童の力の向上が認められたのである。この傾向は特定の児童だけでなく、ほぼすべての児童に同様の変化が認められたため、その原因の検証を行った。その結果ターゲットスキルやスモールステップを設定し構成するSSTでは、児童の困りの軽減や解消が期待できるだけでなく、そのSSTに含まれるその他のスキルの育成にもつながることが明らかとなった。これを踏まえ同時に複数のスキルを意図的に指導することができれば、より効果的に児童の育成につながると推測できる。

また、本研究で行ったシステムを用いた指導の実施負担をさらに軽減するための方法の考察を行い、2つの方法を提案した。これらの実現性や、全機能を使用した場合の長短所などについては今後の研究の中で実践しつつ検証していく。